

## はじめに

ノジエポとの出会いは、調査地セニヤキに入って三日目のことだった。チェンマイで学んだばかりの使い慣れないカレン語を実地で試すのもまだおそろおそろで、夕方には所在なく、共用の水場で洗濯をしていたときである。ノジエポは、持ち前の好奇心もあって見慣れぬ異邦人である私に近づいて「洗濯してるの？」と笑いかけてくれた。私は、その時点で咄嗟に口をついて出るカレン語のフレーズでいきなり「名前はなんていうの？」に続いて「何歳になるの？」と聞いてしまった。するとノジエポは、「十五歳なのに、まだムグノ（未婚の女性のこと）なの。メチガー（恥ずかしい）」と答えた。実際には当時でも、十五歳で結婚している女性は少なかつた。ただ、異邦人との会話で何を前提とすればよいのかもわからず、おそらく恥じらいからこのように言ったのだろう。

これが、村の女性と初めてともにカレン語で交わした会話だった。その当時（一九八七年）、日本では「二十五歳をすぎた未婚の女性はクリスマスケーキ」（二十五日をすぎれば「売れ残り）」という喩えがまだ横行しており、私は妙にこの「恥ずかしさ」を理解した気になり、親近感を覚えた。結婚年齢は大分

異なるにしても、社会的な圧力は同じなのだ、と。しかし、その後の調査の中で、そこに含まれるものの重さはかなり異なるのだと理解していくことになる。また、最も無難な初級会話文だと思つて名前を尋ねたことも、基本的なマナーを踏み外していた。名前を知ることが相手をコントロールすることであり、カレンの大人同士は、出会い頭に相手の名前をいきなり尋ねたりはしないのだ。

私が人類学に関心を持ち始めた頃、フィールド調査とは、臆面もなくエキゾチックで自文化とかけ離れたところへ出かけていくことだった。ところがいざ、そうした「彼方のフィールド調査地」と思い描いたところで調査を始めると、言葉もなかなか通じない、日常の一から十までがわからないことばかりで、少しでも自分の見覚えのある理解できることを見つけると、ほっとしていた。しかし、同時に、親近感を持てる経験が本当に自分が理解している通りのものなのか、実は自分がわかりきった身近な事象を重ねて理解したと思ひ込んでいるにすぎないのではないかと疑問を抱く。これは、特に上述のように親近感を持つことが少なかつた女性たちの生活について言えることだった。そして数多の思い込みや勘違いを経て、自分の身近なものと対照させるときには、自分の拠つて立つところをも改め続けなければならぬことに気づかされていった。そうして調査期間中、私は自分自身のそれまでの生活経験と北タイ山地のカレンの人々の生活との遠近感覚のとり方を試行錯誤していた。その遠近の往復作用は、人類学の他者理解がさまざまな批判にさらされてきた今も変わらないだろう。人類学的調査という営み自体が差異をめぐる遠近、同化と異化、差異と同位のためみない往復から成り立っている。この本は差異へのこだわりと疑問から出発している。

本書は、北部タイ山地のカレンの人々が、タイ国家においてその位置づけの変化とともに経験してき

た生活の変化をただ中から追う。そうして民族の差異と、ジェンダーの差異が交差するところで、これらがどのように相互を实体化させるのかを検証する。さまざまな差異が、相互関係の中でいかに作られ維持され、変容を遂げるのかを、ジェンダーの民族誌を通して論じるのが目的である。大きな語りの中の民族とジェンダーと、それに対する生活の場での民族とジェンダーとの相互作用を明らかにしていく。

フィールド調査を始めた私の関心は、最初からジェンダーにあつたわけではなかった。調査開始当時の目的は、タイという国の周縁にあつて、めまぐるしく生活が変化しつつある山地で、非タイ系の少数民族であるカレンの人々の生活を、民族と宗教という視点からみることだった。カレンはキリスト教徒が多いことで知られる。信教の自由は守られていても、国民国家の統合過程で、仏教が正しきタイ国民の宗教として強化される中、キリスト教や仏教を受容していくことが、少数民族としてタイ国で生きる彼らにとつてどのような選択なのかを知ることが当初掲げた目的だった。カレンに関しては当時、すでにいくつか優れた民族誌が書かれており、そこには祖霊祭祀が女性の生活の根幹に関わるものであると記されていた。そこで、儀礼生活の変動が女性の日常や社会生活に大きな影響を与えるのではないかと、という見当はつけていた。そして、山地カレンの儀礼や社会生活について調査を始めてみると、たしかにジェンダーは重要な視点であることが次第にわかっていった。その意味で私のジェンダーへの関心は、フィールドで始まったのである。

それでも当初は、自分自身の最大の関心事であつた「少数民族としてタイ国家の周縁に生きること」の理解や解明と、「カレンの男であり女であること」とは別の問題としてとらえていた。儀礼と宗教実践の変化が女性の生活や位置づけにどのように影響するのか、という視点にとどまっていたのだ。それが、

調査を始めてから十年間、対面的な状況における民族間関係から、国家政策の中の少数民族、そしてグローバルな変動の中の民族の移動や表象過程に至るまで、「民族」という差異が変遷していく過程を追う中で、その変遷する差異に、実はジェンダーの差異が不可分に関与していることに気づかされていった。それは、「主題の一つとしてのジェンダー」から、「分析視角としてのジェンダー」への移行と言つてよい（中谷 2003b: 374）。すなわち、カレンの民族としてのあり様や民族間関係を考える上でのトピックの一つとしてのジェンダーから、民族を考える上で不可欠の視点としてのジェンダーへ、ひいては、「差異」そのものを考える上でこの上ない考察の場としてのジェンダーへ、と移行した。こうしてたどった軌跡に基づいて、私はこの本を着想することとなった。

本書は、一方では北タイ山地のカレンと呼ばれる民族、特にその女性たちが、山地がおかれたより大きな構図の変化の中でどのような生活の変化を体験したかという物語である。他方、同時に、他者理解の営みの根幹にある差異そのものについて、その形成と動態を、表象や言説と生活実践の両面から考察する議論として提示するものでもある。差異としてのジェンダーを論じることによって、単に民族誌に女性の視点を取り入れるというだけではなく、他文化理解の学においてジェンダーの視点を持つ意義を明らかにしたい。その意味では、これまでジェンダーに関心を持つことのなかった他文化研究者に、ジェンダーの視点の意義を少しでも納得していただければ、本書の最も高い目標を達成できたとと言えるかもしれない。

民族とジェンダーの差異の交差とはどういうことか。「○○族の男であること」と「○○族の女であること」はしばしば別々に語られる。一般に民族衣装などの表象は、男性よりも女性が身に負う傾向があ

る。また、民族間の結婚についてみると特定の民族カテゴリー同士の結婚は、男女双方方向にみられるとしても、どちらか一方の組み合わせに偏る場合が少なくない。こうしたことを北タイのさまざまな事例にみると、民族間の自己関係の中でジェンダーは大きな位置を占めることが実感される。民族の表象やアイデンティティ、民族間関係の中にジェンダーは織り込まれており、性の二重規範は民族の境界面において作用する。したがって、ジェンダーの理解なしには、「民族」のあり方を十分に論ずることはできない。民族の差異化にジェンダーが大きく関与しているのである。民族という差異と、ジェンダーの差異は、語りにおいても実践においても相互に形成され持続する。その過程を考えることで、二つの差異についての新しい知見に到達するのではないか。

差異は支配と権力関係によって作り出され、かつそれが作用する場となる。その中で、究極に差異化され、他者化されるのがここでは山地の女性であるとも言えるだろう。しかし、差異は、支配と権力関係の基盤となるだけなのだろうか。山地の少数民族は、さらにはその女性たちは、この差異の構造の中で圧倒的な権力関係に支配されるばかりなのだろうか。本書では、この差異化の支配構造の中で相互に齟齬もある権力関係の重なりから、彼女たちが応答する隙間を見出していく実践を民族誌的に描き出し、差異そのものを、多重の差異化の最も外縁あるいは底辺から問い直す。権力の側からの作用としての差異は、支配される側にとつては、支配の装置であるが、他方で日常実践においてつながりの契機になるものではないだろうか。差異化による支配の関係が歴然としたものでも、実践によってそこからつながりを作っていく、そういう日常実践に注目したい。そのような、差異の権力性にとらわれた分析者としての私たちの理解・視点をときほぐす可能性を持った実践を、彼らの中に見出すことができるのではないだろうか。

今一つ考えたいつながりがある。調査開始当時、「山地民族」は観光産業に動員され、可視化され、商品化され始めていた。鮮やかな民族衣装の女性たちの写真を多く目にするようになる一方で、山地の女性たちが都市の売春に関わる事例は増え、メディアでもとりあげられるようになっていた。山地の女性たちを支援する宗教組織などを中心とするNGO活動が注目されるようになったのもこの時期だった。その一方で、私自身が山地で出会った女性たちの生活は、周囲に実際に売春に関わる事例が少なかったこともあり、そのように描かれる「山地の女性の現実」とは距離があるように思えた。むしろ、男性がこまめに働き、両親や姉妹たちが近くに暮らし続ける女性の生活は、望ましく思える面も少なくなかった。こうした山地女性の多重の現実には直面する中で、そもそも豊かな日本で暮らす私にとって、タイの山の人々、特に女性たちの生活を知り、理解するとはどういうことなのか。私と彼らの関わりとは何なのか。これを考えることによって、タイのジェンダー／セクシュアリティをめぐる内外の交錯するまなざしをとまどくし、その中に私自身や、私の調査対象である山地の女性たちとを相互に位置づけるようにつながりを見出せるのではないだろうか。

グローバル化の中で北タイ山地の少数民族は、観光、市場、開発、メディア、あるいは市民運動や先住民運動など、さまざまな文脈で語られる。それはまた、研究者として私がどのように語るかということとも不可分である。一方、私自身もまたグローバル化の中に位置づけられ、私をとりまくプロセスは、研究の文脈に限らず、経済・政治・文化の多重の文脈で彼らの世界とつながっている。私たちは多重な差異によって分けられながら、つながっていることを認識し、そのつながりのあり方を考えたい。

三部にわたる各章の構成は以下の通りである。序章で、まず民族やジェンダーの人類学の中に、全体

の目的と視座を位置づけ、議論の枠組を提示する。

つづいて、第一部では、舞台となる北部タイ山地における「民族」と「ジェンダー」という差異の形成、すなわち「山地民族（チャオ・カオ）カレン」や「山地民族女性」をめぐるカテゴリー、表象やまなざしの変遷を追う。タイにおいて山地少数民族が周縁の「他者」として位置づけられてきた過程に、ジェンダー、特に女性に向けられる視線がどのように関与しているかを考察し、カレンと呼ばれる人々を対象とする前提として、これまでの語りや議論の展開を検証する。まず第一章では、私自身の調査開始時から今までの調査地セニャキの生活の変化にふれながら、舞台となる北タイ山地における民族間関係や近年の移動の文脈を理解するために、調査地とムラをとりまく世界との関わりの変遷について概観する。第二章では、「山地民族カレン」が生まれてきた過程を、政策の変遷や、山地をめぐる言説の形成、山地研究の変遷と関連づけながら、特に近年、そのように呼ばれてきた人々自身がさまざまな形でこれに应答していることも含めて論じる。第三章では、山地を中心とするジェンダーの語りを、より大きな文脈の中で位置づけて論じる。これまでのタイの、特に山地のジェンダー研究を振り返り、「タイの女性・タイの男性」に向けられた外からの視線、タイ国内において周縁の「山地民族女性」に向けられる視線の重層性に着目する。

第二部からは、調査村に入り、カレンと呼ばれる人々の日常実践に視線を移す。一旦山地カレンの生活世界に没入し、衣食住を含む生活世界の展開の中で、彼らがどのようにしてカレンの女性・カレンの男性になっていくのか、その過程を描く。衣食住という日々の生活の基盤や、日常とは別の次元にありながら日常に大きく関与する儀礼、そして人々のライフサイクルを、調査を開始した一九八〇年代から近年までの変化を確認しながら考察する。第四章では、彼らの生活の器である家の内外の空間的な配置

と、そこに住む人々の社会関係について、食の共同にもふれながらみていく。第五章では、こうして描かれた器としての家とそこに住む人々によって練り広げられる儀礼について記述し、この連続性と時間を超えた継承がいかに確保されているか、その仕掛けの一端を明らかにする。第六章では、人の一生のサイクルを追いながら、カレンとして男になること、女になることの道程とその変遷を示す。

第三部では、民族とジェンダー／セクシュアリティといった差異の交差する諸相を、語りと実践の相互関係の中で論じる。特に、人々の山地と平地をつないだ移動が激しくなる中で、カレンが他者と出会う局面が多様化していることから生じる事象をとりあげる。第七章では、カレン社会において性的規範がどのように語られるかを紹介した上で、性的規範と実践を共有する人々と、共有しない人々との交渉がもたらす現実と、そこに見出されるジェンダーとセクシュアリティの問題を検証する。そして、北部タイ山地における民族間の婚姻パターンについて考察し、特定のカレン女性と非カレン男性の結婚式の詳細を記述分析することで、民族間結婚において、民族の差異と境界が解消されるのではなく、少なくともその成立のときに、民族とジェンダーの差異が再確認されることを指摘する。第八章は、カレンの若い女性の都市への移動経験がテーマである。従来、女性たちが規範をどのようにかいくぐって移動してきたかを概観した後、九〇年代以降、激増した都市への移動の中で、女性たちがどのような経験をし、それをどのように語り、語りを通じて主体化するかを分析する。

そして終章では、序章で描いた枠組に沿って再度、議論を整理して結論づける。

差異は、必ずしも権力や支配、不平等を内包するものではない。しかし、権力による差異化、「語られる差異」は支配と抑圧を作り出し、実践者や分析者の認識にも入り込む。それに対して「つながり」は、

支配的パラダイムや権力的視座によって規定される差異による分断、垂直的で固定的な関係を解体する言葉として用いる。解体し、そこに水平的な関係によってつながる契機を、対象社会、ここでは支配的な構図の縁辺にある山地カレン社会の実践の中に見出すことを目的としている。

またここでは、「つながり」の語彙と近似の概念として「連鎖」「関係性」が登場する。第三章で議論する「まなざしの連鎖」は、同一の女性カテゴリーなどで到底括れないさまざまな女性（たとえば私自身とタイ山地の女性たちも含む）を、グローバルな国際関係とジェンターの交差から成る多重のまなざしの連鎖の中で相互に位置づけ、それによってつながりを見出そうとしている。また、第五章で用いる「関係性」は、カーステンの relatedness (Carsten 1985, 1997) という概念を参照している。夫婦、親子の関係を基点として、空間的に多くのムラを超え、時間的には世代を超えて、時空の広がりの中で社会関係、価値、文化が不可分に継承され、再生産されていく連鎖の根幹となるものとしてとりあげている。それにより、「家族」や「血縁」などの語彙に依拠せずに、彼ら自身が何を根拠に関係を築くか、ということに注目する。

本書における「つながり」は、これら二つをも包含し、権力的視座から規定される垂直的で固定的な差異化に対して、差異に基づく別の関係原理を作り出す実践を彼らの中に見出すための道標である。